

011.9  
1  
上

汲  
傳  
上

上



卷之三

四

烟  
雨  
山  
水  
圖

七

わふを申候

新毫

朴有達

新ふ

ひそかに宿泊する人達アリシ居  
解物ヲ朴有達ナヒテ御用事ニ付の  
事モアラニシテ其ノ日がハシム高木  
尊<sup>キヨ</sup>ヒタチ又北川ト御用事モア  
シテ御己の友多羅<sup>タラ</sup>ヒタチ也  
中<sup>シ</sup>トサセナリ所トナリシ也彼  
少<sup>シ</sup>貰<sup>ス</sup>と志<sup>ス</sup>トテ多<sup>シ</sup>モ<sup>ス</sup>ナリ少<sup>シ</sup>貰<sup>ス</sup>

遊學すとおもひて陽子の事か  
うつされらばまことにほんとしむ  
望みがうつてうけたはと金子  
摺レタれをされやと南に  
かくはくとくの宿駅スルてゆ  
あかさと弘さしてよしの  
計十よりはる加護カモシカす  
御子ミコトをわせ  
はすきあふ事もお  
リたる事も六月  
家接シテる事無ムツの事シテて居  
りて  
きの事シテて十二月と  
松子マツコの事  
松子マツコの事  
いの事シテて行法ヨウホの事シテり  
金肩キンショウの事シテり

食ふるを喜んで上りよ

新あらきせんじをひきよ

水之

草の風の香りなどすこし

連歌のキス、うれしくて

孤松

白帝のとくとくの聲くさ年

菖蒲

木太のアヤシモの歌で

菖蒲

うわねねの歌うて歌うて

菖蒲

うわねねの歌うて歌うて

菖蒲

神うきすすみ歌ふばくとし

松葉うきすすみ歌ふばくと

川の音信うきすすみ歌ふばくと

日付うきすすみ歌ふばくと

氣なき四十日付うきすすみ歌

うきすすみ歌ふばくと

きもむすびれりぬまへす

うきすすみ歌ふばくと

川

右銀

手を出でて仰ぐへあやまつたり おほ  
王のゆきやまとすれの降りて次  
分ふく所そよがれ 火事ひ  
やまとちや根ねよりにうる  
けりや月うさぎとれんねのく  
やしすすきあれとよのう、無む事  
ありてあくび云ひ月のま  
巴ト

抱くよのうてかくで事こうを  
もととよひよせかくねを  
うみのへうにまくちうりうな  
せひづきはましへまのう  
くじくやあす様のかくへられ  
そくそくやくふ脚たぢきよ隠  
かくすすきうそくゆくゆく  
金一ひとよ處處一あよき  
秀川

跡のまゝにあつて正、ナカヤー

もとよりはれかへやかな。以後

残る。

千三

後ノ春ニ有キよ新か。此  
ノ事ノ事ノ事也。新也。新也。  
アリムトシ新也。新也。新也。

生身の母所より行ひまわ  
る事の事からて新也。因の事  
トシテもとよりは月をも月を  
行つてはまじむもまじむせう。行  
くにゆきとゆきとおふ母の事も  
おゆきとゆきとおゆきとおゆき  
とおゆきとおゆきとおゆきとおゆき

ちるせむらにひじりてはらうとく  
御へまよのぬはもへはひ弱り生井  
城ノスミシルの陽の具古場ひがいも  
きよきよの花ももく今こども吉野の  
まやく横とよみて城とよみ流  
とすみて渴とよむを呼す外  
身代讐レバシナシとよかしゆふとよかし  
のゆつとよかして只山房とよかわく  
うらとよひちとよつゆとよかとよ  
傳とよかとよかとよかとよかとよかと  
かとよかとよかとよかとよかとよかと  
かとよかとよかとよかとよかとよかと

もへりとよかとよかとよかとよかと  
すたよかとよかとよかとよかとよかと

松ノ木や段多處なあ

よそ

かき

後のやうりとよかとよかとよかとよか  
とよかとよかとよかとよかとよかとよか  
とよかとよかとよかとよかとよかとよか

酒波

御身のことを心にさへす行つか  
せり  
けりす草の下つてすまゆの浦

柳原

かひて國をす様國のやまとと云ひた  
川あら枝よろしくわらわれ<sup>キクエイ</sup>瑞氣

亭子もあらん一跡  
おゆの行とくよのまくわらす  
やうも

朴島

多幸日や山とやものむし  
のうそし人い風のま様國  
孟孫のくわいもおきかくんで  
之ゆき  
のうそとよのむしりとく  
玉臺

少<sup>シ</sup>魚子<sup>シ</sup>水<sup>シ</sup>舟<sup>シ</sup>のまくわら<sup>シ</sup>教<sup>シ</sup>れ  
多<sup>シ</sup>

穴ノ入ノ事のよれを  
ウモウモスムシテモカニ人  
ミシテ  
ソシテテのシテ  
二  
頃ノタマニシテカニシテ  
用ノヨリモタマニシテモカニ  
語ニシテモタマニシテカニシテ  
ナシカニシテモタマニシテ  
三  
ホトトギスモタマニシテ  
ト

ヒツキタマサシオ前のかき  
タマシタマタマタマタマタマ  
山田も市のかき  
船  
船  
トタマシタマタマタマタマタマ  
セツキにタマタマタマタマ  
タマシタマタマタマタマタマ  
タマシタマタマタマタマタマ

好  
垂

地をもと産ひかへ在處  
まんまとひがふるのよ  
桂五まともすゆの雪

## 名取

甲子の年秋廢して此處に  
空やむとてはまつりとて  
まつてやうに使ひて橋ひど  
机ね

五の月くわきを消し  
折枝をさかぬくわく  
まづらを落すやうに枝、葉、草  
くわくわくをすくはる  
桂古すくわねじゆのまちく  
いたほれそありやすらう  
かくのうちうきあらむまちう  
山をもと産ひかへ在處

アーリヤ神かくしの花火 桂園

矢印

我國子足立等行  
ト此よりの事文賀<sup>ト</sup>一ノ所

ナナ用ヒツキニシテ

合報

空ノ内ニテテアリト古田ノニテ  
カクナリシム形ノモナリ 鮎糸高松  
シテシテニシテアリサセバサセバ  
サセバサセバアリサセバサセバ  
アリサセバサセバアリサセバサセバ

総四

第一多忙之日用ヒテ東風ノ

可也。此處事後無所為。而有事  
掃除。其事。也。林亦起。事  
人。之。也。以。也。以。也。以。  
在。也。也。也。也。

ちくと月のとよもと

留ふ

トハ万葉山ノ新の旅店まで。うる  
さつて。と。まつて。と。まつて。と。まつて。  
と。まつて。と。まつて。と。まつて。と。まつて。

かとせらや。踏風の。幕。船。船

留ふ

あむれとす

東主亭とす

とくとく竹の花。主。と。と。と。

完矣

はとまつて。はとまつて。はとまつて。

松金のまこと

おもふかの風をいさぎ

土佐

甲、庚

まゆ月ナクアサツヘテシホロの  
傳メテ有ラズノリト

自ら御て手のひくよ若者一

地相

是より左のほつて四つから御あ  
りともるするを以ては論す  
が故あるにとれまつて是極く  
内々かのほつて御つてまつて人盡  
力もとはまといまつて後と坐ねて置  
居つてはいづれもひこせむ

室屋の津利と傳ひて

居らりや隠し今吹きの根

風津

はるかやト波浪と

ゆうよくね

羽松

さわやか早て出立

絶えずまよふと云ふ  
いのちをせむる  
よもやまにゆくがる

而もひと度やうす 狂ひ

因也

かのじよのね隠すとす  
かのじよのね隠すとす

ひきこもつてはまどりて  
用ひよ

武りおの度々おもひよしむる高

さうかくもあらぬおとづれの事

ま暮すくはるの故に

様と細へ帆支亭を

カハセミ

聲望やむてつまんに見ゆ

絶えり

まめの枝多く芽のよむれ

あれ

風と柳<sup>ヨシ</sup>のよみに葉吹

れ

自のふとよきに風すうめで

軍事

り行かぬよめり

仙家

おもむくおもひあわゆつかへ

悦文

おのれの心地とまほの心地

正之

おもむくと居候、居あつて

毛利

あやういふえの雪外とト

ト

おのの親切とて活き活き

妙

おほきおのえをゆくゆき

黒楓

おもひ中了夢よもよこ

毛山

おもひ中了夢よもよこ

毛山

二

おもひは世のわざとまく

萬代

おもひは世のわざとまく

魯

おもひあはる年遅て

夜

おもひあはる年遅て

夜

おもひあはる年遅て

夜

おもひあはる年遅て

夜

おもひあはる年遅て

夜

おもひあはる年遅て

夜

柏原 駿井高陽著

全

じらでまよひをすくられ

いと身にまづふせのあまよひ

もとへふたまのきやみ

支

久深

ゆて師、まよひや ほの

ひかへてまよひをすくひて而

野山

カレニ西やねくわくとてかくし  
極而生や捨ててくわく牛のば  
けくひくひくひくひくひくひく  
橋の森をくわくし冬の森  
おねむくひくひくひくひくひく  
かねむくひくひくひくひくひく  
早人さや詩をうきひのまへ  
移すやゆすくひて船をさし

知中

御者也と詰めに此を思ふ  
トトヨハシカム日のかゝると  
まやたとあそびてうらり晴  
るかくとせぬりりとくら  
活躍やすりとされタ自ら  
トトヨハシヤ柳の恩と詰めさす  
下れても候ゆく事のうらじ  
ハク

## 三枚

まやかくわからんりとあくら  
うかふの鬼行ぢくのくの様

安政浦

馬鹿

馬鹿

芭翁もあまの在の事と詰め

石川屋

七夕

三日月と星に黒川へ天の川

絶えり

白

鳥川

毎日月と星に

桜井

乳房

二重

月夜も星夜も

引て後

夜引て月夜も星夜も

英

月夜も星夜も

川

月夜も星夜も

高

月夜も星夜も

水

第一とふづれのまことにまくら

英

ひきしにやもむす

川

すよまよてゆる

川

ひきしものにまくら

川

ひきしのまくら

川

ひきしのまくら

川

ひきしのまくら

川

ひきしのまくら

川

あいのまくら

川

あいのまくら

川

あいのまくら

川

あいのまくら

川

あいのまくら

川

ひきしのまくら

川

ひきしのまくら

川

カムニホルル

阪牛

二夷

四月の雨を甚也西山白波  
御子山に在りてかくらむゆる

とおもやるをすすめむと  
通す。テモレシカキリトモ

鳥川

山英

モモロヒナホルヘ地主姫。家  
屋宿の事はまことに自らもあつて  
写小海院の信宿ともいふる。

モモロヒナホルヘ地主姫。家  
屋宿の事はまことに自らもあつて  
写小海院の信宿ともいふる。

ねづ

モモロヒナホルヘ地主姫。家

五臺山

祖母の休憩所

ぬる様子に見えぬ事多し  
かく、おも程他にうきはて離れて  
おもむろにあらのまへてひきゆく所  
は實にあらゆる

はるかにあらゆる人間の

人とのうちとあつた

天工のうらうら

あらゆるあらゆるにほのめ

アラタナガセヒトヨリのよみ  
あらわす

高知

五年の暮をひらひらしまのむらに  
弟が死んで中止するところの  
凡あと算べ

あらゆる活潑やいのち

それ津へ

新仙行

新仙行序了然身中魂

新仙行序了然身中魂

新仙行序了然身中魂

新仙行序了然身中魂

新仙行序了然身中魂

新仙行序了然身中魂

百萬石の御内侍を筆頭に上等の  
丸文端の御内侍を筆頭に下等の  
葉市

三事と、主事の御内侍を筆頭に下等の  
笠山

は御内侍を筆頭に下等の御内侍を筆頭に下等の  
御内侍

主事と、主事の御内侍を筆頭に下等の御内侍を筆頭に下等の  
御内侍

御内侍を筆頭に下等の御内侍を筆頭に下等の御内侍を筆頭に下等の  
御内侍

御内侍を筆頭に下等の御内侍を筆頭に下等の御内侍を筆頭に下等の  
御内侍

御内侍を筆頭に下等の御内侍を筆頭に下等の御内侍を筆頭に下等の  
御内侍

喜

ウツツリホムモヒタリホムモヒムモ  
ハシマニハモ庵ツレモモ  
ヒツカトキツカニ庵ツナガルモ  
ミエ

ノモサツハモサツモソウト  
モカツモカツモモカツモモカツモモ  
モカツモカツモモカツモモカツモモ  
モカツモカツモモカツモモカツモモ

### 名録

日暮や娘もまく石井  
佐久  
佐木下川とおとおとおとおとお  
ちよゆ中木とおとおとおとおとお  
はくとおとおとおとおとおとおと  
とおとおとおとおとおとおとおと  
おとおとおとおとおとおとおと  
おとおとおとおとおとおとおと  
おとおとおとおとおとおとおと  
おとおとおとおとおとおとおと

まほのとて一すらもやく  
おもひりてはまつた國の事  
ありてはまつた國の事  
文机の事まつた國の事  
まほのとて一すらもやく  
又まつた國の事まつた國の事  
又まつた國の事まつた國の事  
自假

まほのとて一すらもやく  
おもひりてはまつた國の事  
馬の事まつた國の事  
アマリモホウカウムカ  
樹おもひりてはまつた國の事  
くしゆう物語の中へおもひりて  
おもひりてはまつた國の事  
おもひりてはまつた國の事  
夕暮れ月もあらうとおもひりて  
おもひりてはまつた國の事

あらーの吹きぬく所アラニ お士  
さすえまつるはくはく お手アハハ 左隣  
かくらとくへや詰アツク まくわす  
ああや持アシタマ うの日ヒ ひ 面マツコ  
玉極タマハタシ つまむし管アマツシ がたりアガリ 売アマツシ  
わくらやたまくわくまちアマクマチ 井アメ 文士

手アハハ まつるはくはく お手アハハ アハハ  
いふくまくわくまちアマクマチ 井アメ 文士  
小川アマツシ すくがくアマツシ 井アメ 文士  
あらまくわくまちアマクマチ 井アメ 文士  
みややまつるはくはく 一アキ 千呂  
鳥アラ わくはくはく 一アキ 可兆  
あらまくわくまちアマクマチ 井アメ 文士

言ひはくすとまへまつる 了也

経より

嘗てかをまへ自や彦原 章風  
鹿追ハタチのかとくも うかと  
さすかむかよきとおとせじて 言通  
ひりと水玉中きり 沢也

本因

纏ふともねはゆの小移し 夢  
ちく 腹アヒくも揃れ多魚 有  
ぬまうる事改ね減マツメへ多魚 雪  
ひそしき事改ね減マツメへ多魚 雪  
咲く 怪アリくも端高山 宝  
川左 有川 有川

かくの山にあがみ

鳥也

右の事は古河の事也  
ふんと云ふ事也  
あれ等は年から月也  
事の事も御通り  
已六丁等の御車も御通り  
ひよしにかくの意  
小豆の御車に之をもて  
えりあらまも御通る事也

すまひがれどり  
てあはれども、をとく  
よそへそつまもく  
新しくは、竹の宮  
川左

名根

すまひがれどり  
てあはれども、をとく  
よそへそつまもく  
新しくは、竹の宮  
古通  
川

春の暮れやむらをやまやまの月  
夜  
張り合ひ年ごとよまさか而山童  
娘たち入はざじゆの月を  
かゝり背あてあくゑるを風せ  
毎日かづくふくらみの通風  
新郎の臣をさる丈まうに左  
新郎や後宮下駄かくすゆかく 佐東  
夢

春の暮れ 煙ノトヨカク 一鳥曲

絶句

桜書のさくらをくらへ

桜酒

中身へひきこ入はぬの自外

幕の下に叶ふ又せり花

風十

御子の子の春水が花一

白露

在哉のもの獨りあつて

かく書くは後悔せ世難

うつむかひよやうされをひす

アキ

詫ひかきのまゝ小便

アキ

ゆきゆきしたひまよりだう玄度

アキ

増します重て少所のゆゑ、褐色

アキ

たまに一見もあらぬ

アキ

豈所のまことにゆひせぬや文皇

アキ

まほのいと不意にほんたん

アキ

ナカとまゆれよ形、ソヤカ

アキ

緋とお桑一木

ホウコウ  
アキ

ひめのまゆ、ゆきりくの

アキ

ほのまゆ、ゆきりくの

アキ

かくとまゆのまゆ

アキ

かくとまゆのまゆ

アキ

かくとまゆのまゆ

アキ

アキ

近所よこ在ちまちかく

山泉

五十九の子れをうへひす

以て

まんとまつりあはやくも

文選

かわさしく馬のめりけ

李太

名録

筆記とかきつやくとく牛

文獻

筆記の筆いづふや苑のど

貴子

筆記と筆記と筆記と

墨施

筆記の筆記の筆記の筆記

一處

さかのうすきわらふくへ あくま お

サニ

引捨てあれへゆの うすく 壱

室

絆のまやあらむようやまくわ え

室

まくわあらあくようやまくわ は

室

静かにや島くわまくわ ね

右月

おとくやまくわまくわ くわ

左月

おとくやまくわまくわ くわ

左月

峰くわまくわまくわ くわ

右月

峰くわまくわまくわ くわ

右月

峰くわまくわまくわ くわ

右月

よのりそせんねんせんせん 不りふ

松支

せんりあらゆるしめく ゆきふ

文嘉

あらわよト一望くわまくわ くわ

水泉

いとくわまくわまくわ くわ

左月

瀬生東中

りよほのふれ、やのまくわふ、

右月

よくちくわすてうつまくわ、

左月

よくちくわすてうつまくわ、

左月

冬日山高木山の今うる里書

の、山やかくまの山もあつたる

山川やたらうらとまき山一 破竹

わきまゆらむまくとまくわれ

ゆくじくまくらむまくとまくわれ

山高木山の山もあつたる

山高木山の山もあつたる

東室

金人よりとまくわくわくわく

東室

まーねくわれて山くわくわくわくか 茶茶士

ニニちやせんとまくわくわくわく

毛利

## 國

やねのやくはくの物の高木山の  
山高木山の山もあつたる

かくまくらむまくらむまくらむまく

まくらむまくらむまくらむまくらむまく

まくらむまくらむまくらむまくらむまく

店先生や年少の者も皆也

経文行

書事や文章又歌を這てし。

自是の所へと申すと算へたる  
かくの経掛多う算へて其の  
歌に

馬娘二年生年ハ一茎

あすかに因縁せしとちよひ  
其成詩をいはむるに  
通じてよおの事の歌を  
歌の事一ふをなすり  
物の名もお奈月と云ふわ  
かよ之にかかさうの  
事よりお目ゆるはゆる

はあらう皆の御用事山の形

泉

六経をもとへて解せんから

友

りくへてゆき空のすむよとよ

友

地引の大代よりすま

子

松やさき聖教の有り

化

黒板金のまゆをやく月の

井

まゆのまゆうれ黄葉の葉

井

黒板金のまゆをやく月の

井

黒板金のまゆをやく月の

井

黒板金のまゆをやく月の

井

庄本ふるい志の志がふ

泉

黒板金のまゆをやく月の

井

黒板金のまゆをやく月の

井

黒板金のまゆをやく月の

井

印子一やまきねても傳へた

井

黒板金のまゆをやく月の

井

冬日のよき處へはまくもと  
山のあらゆる處をも植へ

とほつてもてはせやうに締の手一通

山のあらゆる處をも植へ

とほつてもてはせやうに締の手一通

山のあらゆる處をも植へ

とほつてもてはせやうに締の手一通

経年少

所為

モツ  
修りて行ひそめのま戸附

シテシテ多忙の事に自外

嘆ふ給ひてゆるはれて斗百

度の事に自外

ゆくかくしておもむせやうや

ゆくかくしておもむせやうや

ゆくかくしておもむせやうや

ゆくかくしておもむせやうや

萬葉

おほの屋敷のあいだに松林

をひらいたふねとあがめ

をもとへ連れてはるから

おまかであがめ

唐けぬのまきまちまく

アツシマサシマシマシマ

ワタシモトヤマミコトヨウマ

アツシマサシマシマシマ

アツシマサシマシマシマ

山中の里アヒル中止

アツシマサシマシマシマ

アツシマサシマシマシマ

アツシマサシマシマシマ

アツシマサシマシマシマ

アツシマサシマシマシマ

アツシマサシマシマシマ

アツシマサシマシマシマ

名録

カシマヤチモツヒヅムサ  
シタハ  
シテヤ日暮五郎と望月所  
立事  
ス、松や木の音がもえと  
取二  
城ノ山アマソシト陸ノ山  
之一  
シテ松山那岐山ノ木の音  
東如  
立事ノ門ヒヅムサカニ金日  
萬五

立事ノ門ヒヅムサカニ金日  
萬五  
シテ松山那岐山ノ木の音  
東如  
立事ノ門ヒヅムサカニ金日  
萬五  
シテ松山那岐山ノ木の音  
東如  
立事ノ門ヒヅムサカニ金日  
萬五  
シテ松山那岐山ノ木の音  
東如  
立事ノ門ヒヅムサカニ金日  
萬五

立事ノ門ヒヅムサカニ金日  
萬五

頃年

七里にまづくまへ主ふと  
大正の去るをもせられ

それまでにあたへてよきのう

経より

鳥

うきわす一席のゆゑ我門  
月とみゆ事り呈外

うきわのねおまかせ申せ  
小まゝ大の多いそり  
タニヤヌ所ひゆうきの舞  
わからむとてやどれし木  
えしとて桃工アシタシ  
ひよの日またにあはせ  
云々に浮舟す風と  
るもよき事のゆゆ

歌  
ほのうららとすまめしり  
月の丸店下へまんじやの屋  
のうへとくらまくわざの上へ卦  
えもとくらまくわざの上へ卦  
鶴あてくらまくわざの上へ卦  
おとせ仕事へおのれんへ房  
原歩ゆきもよふぢの井手さん  
手さとう旅店へ宿泊さん  
タ

あひるか自の舟相川  
まき年もしかれ御さん  
魚りのいはあひるの舟  
船橋すまきゆばく  
まくまくよひがる  
おかづくらまくわざ



ワサヤモニタニシテルセキトモ  
リヒニルト く い い 有 布  
アラシニカタシテのモルキ二  
ウリヒルハシツヤムリヒルル  
ウリヒルヤカヌルハ  
シリハシのモルキカタシモハシ  
シリハシアラシカタシモ  
アラシニカタシルハシ  
牛革牛革 松重

八朔の三日十面度の河原ノシテ  
モリヒトセニナリトモモリモナリ  
モレヒテ度多シカタシモハシ  
モリヒトセニナリトモモリモナリ  
モリヒトセニナリトモモリモナリ  
モリヒトセニナリトモモリモナリ

又・モリヒトセニナリトモ

自も

